

冬休み前 校長講話

1 年の最後に春から生徒の皆さんを見て、伝えたいと思っていたこととお話します。

私の人生には「あの時に戻れるなら、もう一度戻りたい」と思う瞬間が一つだけあります。それは、高校 3 年生の 1 月です。共通一次（今で言う共通テスト）を週末に控えた日にクラスメイトが心臓発作で急死しました。寒い朝でした。突然の訃報に言葉を失いました。そんな私たちに学校は、週末にある共通テストに配慮し、「生徒は通夜には行かないように」という決定を下しました。「参列したいです。」と不思議と誰も言い出しませんでした。厳しい学校でした。教師の決定に生徒が反対するという風土もなければ、勇気もありませんでした。もし、1 度だけ人生を遡れるなら、あの日に戻って「私はそうは思いません。お通夜に行きたいです」と言いたいと今でも思っています。

池田潔が書いた「自由と規律」という本の中で今でも印象に残っている話があります。イギリスのハイスクールに留学中だった池田潔は数学の苦手な生徒が、廊下で数学の教師に注意される場面に居合わせます。教師にピアノの練習時間を割いて数学の勉強に充てるように注意されると、13, 4 歳の少年が「数学の勉強が足りないとおっしゃるのなら、もっともな事であり、謹んでお受けする。しかし、自分のピアノの練習は自分の問題であって、少なくとも数学教師の関知するところではない。筋の通らぬ指図を受ける筋合いはない。」と言い放ち、さらに驚いたことに、教師が直ちにその場で生徒に謝罪する姿を見るのです。校則に縛られた厳しい学校の中で、なんら矛盾することなく、精神の自由が存在することが驚きを持って書かれています。

大学でこの本に出会いました。本を読み、高校 3 年のあの日、諦めないで、きちんと先生に伝えればよかった。と思いました。きっと伝えたら、聞いてくれたはずです。そんな先生方でした。私自身の自戒を込めて、皆さん達にお話します。

4 月から皆さん達を見てきました。多くの生徒が「優しくて、素直」。勉強も一生懸命しています。そんな学校の雰囲気は私は大好きです。けれども、時に素直すぎて不安になります。薄っぺらな権利意識や我が儘の主張ではなく、本当に主張すべき言葉を飲み込んでいませんか。「自由と規律」は両立します。青森東高校ではそのどちらも大切にしたいと思っています。規律は外側からもたらされますが、自由は自らの力で獲得しなければなりません。勇気を出して、自分の想いを教師や大人に伝えてください。それがすぐにはできない人は、伝えられなかった悔しさを沢山経験しながら、本当に声を上げることが必要な「いつか」に備えてください。学校という管理された空間の中でもどうか「内なる自由」を失わないでください。同時に、皆さん達が言葉を発する勇気に見合う、対話ができる環境を我々教員も作っていきたいと思っています。

1 年が終わります。今年 1 年の全てのことに感謝し、来る年が良い年であることを心から願って、冬休み前の校長講話とします。